

# 保育の変革を目指して(1)

―折々に考えたこと―

入江 礼子

## 「静」の園から「動」の園への第一歩

はじめに

光陰矢のごとし。月日の経つのは本当に早い。私は、最近までP女子大学幼稚部で五年間園長を兼任していた。振り返ると、この五年間、幼稚部のある週日は子どもたちが家路につく二時過ぎまで「命を預かる」重みを感じない日はなかった。また本務である大学での講義をしていても、その間に幼稚部か

ら子どもたちの怪我その他を知らせる伝言が携帯に入っているのではないかと心配でたまらないことも多くあった。朝預かった命を無事に保護者の手元に返すという当たり前のことの重さに押しつぶされそうになったこともある。しかしほとんど圧倒的ともいえるこの「命を預かる」重さを感じ続けた五年間は、不思議なことにはただの一度も職場に向かうことに対して「嫌」と思ったことのない年月でもあった。い

や、「嫌」どころか、一緒に幼稚部の兼任を言い渡されたNさんとコンビを組んで仕事をするということの楽しさと醍醐味を知った日々であり、未成熟な保育実践の場が様々な紆余曲折を経ながら成熟への歩みを始めるときに当事者でいられる幸せと、当事者であるがゆえの責任の重さ、そして様々な選択を迫られる苦しさを心ゆくまで味わえた日々でもあったのである。保育の当事者性とは、その場を作り、もちこたえる責任をもつということであると強く感じた。このスタンスはいわゆる周辺人としての研究者のスタンスとは大きく違っても感じた。

### 初めての小さな公開保育をめぐる

二〇〇五年度、幼稚部兼任になって五年目に入ったとき、私は担任の先生方に「今年は小さな公開保育とその後に続く保育研修会を十二月に予定したので、それぞれが今の自分としてのテーマをもって臨んでほしい」旨を伝えた。若い担任たちは昨年とメ

ンバーが入れ替わらず、曲がりなりにも少し保育の積み上げの時期に入ったと感じたからである。それぞれのテーマは相談に乗ることにして、そんな宣言を行った。しかし日常の保育の忙しさのなかで自分のテーマを決めるのは容易ではない。ましてやまだ「自分からこのテーマで」という「保育者自らが発的にテーマ設定を行いたい」という段階ではなく、結局は園長である私からの、ある意味では「業務命令」の形であつたので、テーマをもち続けた保育者、途中でテーマが変わった保育者、テーマをもち続けられなかった保育者と、各人各様の様相を呈した。けれども「小さい形ではあつても外部に開く」ということは譲れなかった。そこでテーマを日常の保育から立ち上げたもので、日々の保育と同時並行で、かつ、保育者間で共通理解がしやすい「造形活動」を切り口とした発表をすることに変更した。私が幼稚部の保育が「ここに至るまでの経緯」を、担任たちが「今年度の造形活動から」、またN

さんが「今後の課題」ということで公開保育と拡大園内研修会を行ったのである。外部からは十名程度の方に来ていただくという本当に小さな公開保育と研修会ではあったが、曲がりなりにも外部に開いた活動を行えたことは、それまでの振り返りと今後に向けての方向性がある程度明らかになるという大きな効果をもたらしたと感じている。

未来に向けてのひとつの節目に差しかかったこの時期に、この五年間の折々に出会ったこと、そしてそこから考えたことをもう一度今の時点で整理をしつつ、この五年間の意味を私なりに問い直してみようと思う。

### 曖昧な保育観

私は幼稚部の兼任になるまで、恥ずかしいことに自分の保育観というものを意識的にしつかりと客観化して考えたことはなかった。それはそれまでは

「根っここの部分が同じ」と感覚的に感じられる人々

の間でしか生活していなかったこともあり、自分の保育観がどんなものであるかを説明したこともなかった。あるのは自分の身体のなかにある感覚だけである。もともと感覚的な私は身体で感じたことを言語化することが「不得手」であり、それまでは「不得手」で許され、済まされていた。しかし幼稚部兼任となったときから、いや、兼任とは名ばかりでほとんど幼稚部専従のような生活を送るようになった瞬間から、「不得手」では済まされない事態と遭遇し、自分とは違う保育観や人間観をもつ人々と相対するなかで少しずつ自分の保育を語る言語を獲得してきたようにも思う。勿論今でもその言語を獲得し尽くしたとはいえないが、そのプロセスを辿りつつ、先ほど述べたようにこの五年間の意味の問い直しができればと考えている。

### 「静」の園の存在

幼稚部は大学の併設校であり、大学の建物の一階

部分にあった。大学は幼稚園教員を養成しており、大学と同じ敷地に幼稚園があるということは本来であれば学生にとっても研究者にとってもよい条件といえる。しかしながら私が大学教員として入った十年前前から幼稚園兼任になるまで、子どもたちが園庭で元気よく遊んでいる姿というのはほとんどなかった。ちょうど二階部分に渡り廊下があり、そこから幼稚園の園庭が全て見渡せるのだが、外遊びをする子どもの姿がなかったので随分と静かな幼稚園だと思っていた。保育室のなかにはテーブルと座布団（防災頭巾兼用）のついた椅子が整然と並べられていた。本来ならば併設園があるのだから、そこで何か一緒にできることはないかと考えるのが当然なのだ、これも「直観」で「難しい」と感じ、自分から幼稚園に積極的に働きかけていくということは教員専任時代にはしてこなかった。たまたま



約三十年前私が初めて担任を務めた幼稚園の娘さんで、当時同僚として一年間ご一緒した方が主任をしているとわかり、五年間で二、三回園を訪ねさせて貰ったことはあった。保育室に案内されたとき、やはり外から感じたのと同じようになかは整然としており、壁には子どもたちが描いた行事の絵が貼られていた。あるとき、同じようなこいのぼりがいっぱい作られていたので聞いてみると「同じものを作らないと保護者がうるさいのよね」という返事。なかなか大変だと思つた私は以後幼稚園を自分から積極的に訪ねることはなかった。

### 「静」の幼稚園に入る①——きっかけ——

しかし運命は面白い。避けたものは必ず何らかの形でまた舞い戻ってくる。そんな思いを強くした幼稚園兼任の内示だった。同様の保育観を共有できるNさんと一緒に兼任ということもあって、やらせていただくことになった。その理由のひとつは学園全

体が改革の時期に入ったということある。大学・短大の移転も含めて、その大きな流れのその一環としての幼稚園部の園長交代でもあった。幼稚園部は五十年近い歴史があり、そのなかで次の年は三歳児が六人という状況になっていた。幼稚園部のハード面である建物の内装改修も含めて、私に課せられたことは園児数の確保であった。すぐにはなくても、その確保の道筋をつけることが経営的には最大の課題であったのである。

### 「静」の幼稚園に入る②―違和感―

日本の幼稚園の保育内容の歴史は振り子のようだと いわれる。幼稚園が始まって以来約百三十年が経つ現在まで、保育内容は数回に渡って大幅な改訂をみているが、その度にその当時のスタイルが幼稚園の保育内容として残っていったことは周知の事実である。私が着任した当初の一日の流れ(図1)を見

てみよう。

この流れだけを見れば幼稚園として現在でも取り立てて特殊な園とはいえない。むしろ普通の園といっても過言ではない。なのに私は何ともいえない違和感を感じたのである。勿論これも体感のレベルではあった。しかし、今回このことをもう少し深く考えてみる機会をもってわかったことがある。それは一言でいえばこの園が「静」の園であるということだ。つまり園に「動き」がないのだ。直感ではあったが、このことが私の何かにひっかかり、それが違和感として感じられたということになる。

「静」。これは子どもの本来の姿とは相反する姿ではないのか。子どもは「動」。これが私の無意識にもっていた子ども観の一部であったとその後気づいた。子ども本来の自然の姿である「動」にあふれた幼稚園にしたい。いっぱい遊んで「あしたも幼稚園に行きたい！」と思う子どもたちを何とか増やした

項目	内容
登園	登園後、制服から体操服に着替える（園にいる間は体操服で過ごす）
朝の体操	全員園庭で行う
朝の集まり	朝の挨拶、出席調べ、整列して歌を歌う、当番活動（ウサギの世話、ゴミだし等）
その日の主活動	クラスごとの一斉活動（絵を描く、折り紙を折る、その他）
合間の自由遊び	小学校の遊び時間と同じ。園の遊具は保育室前のスペースに並べられており、子どもたちがそのスペースより遠くで遊ぶことはほとんどない（園庭の滑り台も保育者が付き添って一斉に行う以外は使ってはいけないことになっている）
お弁当前の片付け	
お弁当	一斉にいただきます、ごちそうさまを行う。決められた自分の席のあるテーブルで食べる
静かな遊び	絵本を読む、絵を描く等。園庭に出てはいけない
片付け・掃除	教師が帚ではいた後、雑巾がけを行う
帰りの会	着替え、絵本読み等
降園	園庭に整列後、保育者がそれぞれ指定の地点まで子どもを送っていく

図1 着任当初（2001年）の1日の保育の流れ

い。すべてはそこから始まった。

### 「静」の幼稚園に入る③

#### ―歴史のなかでの保育内容の形骸化―

幼稚園は五十年に近い歴史をもっている。高い棚の奥や倉庫の奥を見たとき、そこにはその時代としては立派だったと思われる楽器や教具、遊具の数々があることがわかった。あることはわかったが、それを今すぐ活用するには錆びていたり、傷んでいたりでも使用することはできない。ただ、わかったことは「保育内容に関して熱心に取り組んでいた時期があった」ということである。しかし、今述べたようにそれらのものはすでに「お蔵入り」となり、それに代わる教具や遊具があるわけではなかった。職員室の奥の戸棚からは以前の日誌も出てきたし、保育内容が領域になってからと思われる教育課程も出てきた。前から幼稚園部にいる保育者にこの教

育課程の存在を聞いてみると、主任は存在を知っていたが、それを参照して指導計画を作るということはなかったようだったし、担任保育者に至ってはその存在すら知らなかった。ただ先に述べた一日の流れだけが、いつからか、その形を変えずにおそらく「例年通り」ということで綿々と引き継がれていったのだと考えられた。担任保育者が自分の頭脳を駆使して考えるのは「その日の主活動」の部分のみといても過言ではないという状況が私が着任した二〇〇一年度当初にはあったのである。それ以外の流れはほとんどルーティンとして決まっており、その間い直しもないまま引き継がれていた。「その日の主活動」にしても前からいる保育者に聞くと「前の日に、適当に考えた」ものであったという。それに向けての具体的な活動の計画を書き残しておくことはなかった。幼稚園部の歴史の流れのなかでは指導計画を熱心に立てていた保育者がいたことも日誌から

わかっていたが、指導計画のようなものはもうなくなっていたのである。

### 「動」の園にむけての第一歩

これだけ「静」が支配する園をなんとか子ども本来の姿と私が信じる「動」の園にするために一歩を踏み出さなくてはならない。そんなことを思つての園長業出発となった。

園環境を見直してみると、「静」の部分はいっぱいあった。まずは図2の保育室のなかは先にも述べたようにテーブルと椅子がきちんと並べられ、その椅子にも個人の座布団が置かれており、子ども個人が座る場所はいつも一定であった。また保育室を出たところはコンクリートのたたきになっており、そのすぐ園庭側には滑り台、ジャングルジム、シーソー、鉄棒といった固定遊具が所狭しと並べられていた。この意味は見方の分けられるところであるが、私には園庭の奥のほうには行かずに保育室の前にあるこれらの遊具を使って遊んでほしいという保育者側のメッセージにも受け取れた。勿

3歳児保育室	4歳児保育室	4歳児保育室	5歳児保育室	預かり保育室
コンクリートのたたき				
滑り台・ジャングルジム・シーソー・鉄棒・花壇				
園庭（保育室の南側）				

図2



論このように受け取れるということが正しいかどうかの検証をすることは難しいが、少なくとも固定遊具を越えて更に向こうにある園庭で遊んでいる子どもの姿をほとんど見かけないことからそのような推測したのである。これをなんとかしなくてはならない。

また保育内容に関することでは一日の流れのところでもわかったように、保育者が目の前にいる子どもも状態を理解しながら柔軟に保育を行う部分が非常に限られている。これは保育内容における「静」の部分と呼んでもよいのではないかと考えた。もうひとつ忘れてはならない「静」の部分は保護者会にあたるものがなかったことである。幼稚部の主催する懇談会やマジックミラーを使用した保育参観はあったが、親が主体的に動く保護者会は立ち上がっていないかった。前園長は「今ほどの幼稚園でも親対応に苦勞している。保護者会があれば、保育のわか

らない親が言いたいことを言ってくる可能性があるので、あえて混乱が起こるような場を作る必要はない」と考えられていた。しかし幼児期の子どもをもつ保護者は親になってまだほんの数年しかたっていないことを考えると、その不安を受け止める場としての幼稚園の役割もあるのではないか。また保護者は私たちが思う以上の力をもっているので、それを見すみす埋もれたままにしておくのはあまりにももったいない。子どものために何か力を借りることができないだろうか、そう考えていずれば保護者がすべてのリーダーシップを取れるようになることを願ってふりーじあ会という保護者会を園主導ではあったが立ち上げることにした。

こうして「環境」「保育内容」「保護者」、この三点の「静」から「動」への初めの一步を踏み出すことになったのである。